
幻想詩篇

森野樹海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想詩篇

【Zコード】

Z8844T

【作者名】

森野樹海

【あらすじ】

不老不死の力を得た無敵の外道である主人公が奴隸ハーレムを作る話。気ままに大陸を旅する主人公と奴隸。時々誰かを助けたり、助けなかつたり。水戸黄門的な進行で、主人公一向は行く先々で様々な事件を起こします。世界中から美女を拉致つて、レツツハーレム！

戦士は倒れた。

手にした槍は折れ、盾は碎け、戦士を守るものはもはや何一つなくなっていた。その身体に、矢が降り注ぐ。

駆け抜ける兵たちは雄たけびを上げ、突撃していく。

そこは、戦場だった。

「アウト・ファンシー・エレメンタルマリオ」

怒声と悲鳴が交差する地獄の中心で、少年はたしかに自分を呼ぶ声を聞いた。

それを無視するかのように、少年は空を見上げる。どこかの部隊が、大規模な戦略魔術を発動させたのだろう。雲ひとつない青空は、爆炎で灰色に染まっていた。

「アウト・ファンシー・エレメンタルマリオ」

声は、すぐ傍で聞こえた。

少年は空を見上げて、振り向きさえしない。その胸を、長い槍が貫いた。それでも少年は振り向かない。

立ち尽くす少年にもまた、千の矢が降り注ぐ。

「アウト・ファンシー・エレメンタルマリオ」

そして、ようやく少年は声の主へと振り返るのだった。

「というわけで俺は不老不死の身体を手に入れたのだよ

「まったくわからない。どういうわけなの？」

「つまりだな。爆発四散した俺の体の下を流れていた竜脈が、何かの拍子に偶然活性化してだな。今にも昇天しそうな俺の魂をよみがえらせたのだよ！」

「竜脈が活性化して死人が蘇るなんて聞いたことないけど?」

「俺も聞いたことねえなあ

「でも蘇つたんでしょう?」

「ありやあ嘘だ。なんだお前以外に純情なんだな。こんなホラ話信じたのか?」

そう言って、アヒヤヒヤヒヤと下品に笑う少年 アウト。そしてその少年に蔑む視線を送る少女。

彼らは馬車に揺られながら、枯れた大地を旅していた。

キタゼヌルリト大陸。永きに渡る帝国と王国の泥沼の戦争がこの大陸を蝕んでいた。

蹂躪された大地は痩せ衰え、作物は実ることを忘れた。彼らの視界いっぱい、見渡すかぎりに広がる砂色の荒野が、その事実を静かに裏付けている。

かつて大地を潤したはずの湖も沼も川も、皆とうの昔に枯れ果てた。草木も花も、鳥も獸も、虫けらどもすら例外なく土に いや、土すらもまた砂に還る、そういう世界。

地獄のひとつが、間違いなくその世界にはあった。

そんな地獄を旅する少年と少女。彼らはもちろん貴族ではない。商人でもない。

ただ気の向くままに旅先を決める、目的もなく大陸を枯葉のようにさまよう。

彼らのようなものこそ、眞の意味で旅人といえるだろう。

「それで、この先のオルテガとかいう村にはうまいもんがあるんだろうな?」

「そんなの知らないよ。そもそも私だってオルテガ村とかいうところには初めてなんだから」

「あー、そうか。おまえ引き籠もりだったんだもんなあシセル」

そう笑って、アウトはシセルの頭をなでた。

シセルと呼ばれた少女は、年の頃16・7ほどだろうか。肩のあたりまである黒髪の耳の上あたりから、山羊の角のようなものが生

えている。

そして彼女には、体中のいたるところに、ベルトやら何やらを駆使して大量のナイフがくくりつけられていた。

全体として、悪い意味で非常に人目を引く外見ではあった。

シセルはアウトの手を羽虫かなにかを払うかのように振り払う。その視線はゴキブリを見る主婦のように鋭く冷たい。

「おまえの視線は相変わらず殺気がこもってるなあ。そんなんだから潤滑な人間関係が築けねえんだよ」

「おまえのようなクズに言われたくないな」

「そりゃあ、まあ、たしかにそうだ」

上機嫌に笑うアウト。彼の上機嫌にはわけがあった。

彼は馬車の前方でトラのような魔物の群れに襲われている豪華な馬車を見つけていたのだった。

馬車の命運はもはや風前の灯といった有様で、恐らくは放つておいたとしても、数分も持たないであろう。アウトはそう当たりをつけっていた。

この大地では全くありふれた、恐らくは戦争以外で、人が最も多く命を落としているであろう災害。そつ、それが魔物といつものだつた。

ボロオンと呼ばれるその魔物は、巨大なネコ科動物のような外見をしているのだが、その巨躯をしてもなお似つかわしくないほどの長大な犬歯を備えている。

その毛皮は黄ばんだ砂埃に塗れたような、薄汚い茶褐色をしているため、それが保護色となつて彼らの発見を非常に難しくしていた。であるから、ボロオンの群れ（彼らは群れで狩りをする）を馬車の上から発見出来ると言つことは、つまりはこういつぶつて、もう完全に手遅れであるということなのだ。

アウトはへラへラと軽薄な笑みを浮かべながら、馬車を加速させる。

「ありやあ、金もつてるな。見た目からして間違いねえ」

「商人か貴族だね。かわいそうに」

つまらなそうにシセルは相槌を打つ。その表情は、言葉とは裏腹に慈悲のかけらもなく冷めている。それは彼らにとっては日常の出来事にすぎないのだ。

「シセル、おまえ突っ込んで来い。宝箱の中身はなるべく傷つけるなよ」

「はいはい、わかってるよ。どうせ私に選択肢なんかないよ」

嘆息。

そして、シセルは御者台から飛び降りた。

「止まれ　永遠なる世界！」
ラストナイト

その言葉とともに、世界が凍つた。

馬車馬は、躍動する筋肉も生々しく、足を振り上げた姿勢のまま静止し。アウトもまた歪んだ笑みを浮かべたまま、ピクリとも動かない。

風に舞う砂塵は中空で止まり、馬車を襲おうと飛び出した魔物もまた、牙をむいたままの姿を空中で凍りつかせている。

世界が、時間が、停止していた……ただ、一人の例外を除いて。

（意外に数が多いな。秒数、足りるか？）

魔眼、ラストナイト。

魔眼と呼ばれるそれは、眼球に存在する鬼族に特有の器官であり、また能力の名でもある。

発現する能力は個人によってかなりの差異が認められるが、むろん魔眼に共通の特徴もある。

それは魔眼の発動中、使用者の瞳の部分が赤く発光して見える（正確には、瞳自体が発光しているわけではなく、魔力が魔眼で消費される過程で可視化しているらしい）ということだ。

彼女の能力は時を一日に一分間だけ、止めるというものだ。

稼働時間が総合で一分未満の範囲にあるなら、連続発動も可能である。

アウトの馬車から、魔物に襲われている馬車まで、彼女の足でおよそ1~2秒の距離。

セル・イノ・クーゲル・シユライバーは鬼族である。その身体能力は平均的な人族を軽く凌駕する。

故に、300メートルはあるつかという距離を、ほんの1~2秒足らずで駆け抜ける。動物はもとより、魔物にすら比肩する瞬発力が、

鬼族である彼女には生まれながらにして備わっていた。

シセルは腰の鞘からナイフを抜き放つと。

投擲。

それは静止した時の中で、慣性を失ったかのように空中で止まつた。

今にも馬車に襲い掛かるうかという魔物の横顔、その寸前で。次いで、左足のブーツの側面に仕込まれたナイフを一匹目に向かって投げる。

確認できた魔物の数は8。

右足、左腿、右腿、それぞれに仕込まれたナイフを踊るようにに撃つ。

その動作を終えて15秒。

彼女は魔物の群れの中心に立つていた。

「そして、時は動き出す」

今までに馬車に襲いかからんとしていた魔物は、その瞬間、ナイフの衝撃を横顔に受けた。

強制的に水平に方向を変えて吹き飛んでいく。

同時に上がった、獣の断末魔の数は4つ。

残りは三匹。

「これまでがそうだったようだ。……ここからも、私だけの時間だ」世界の秒針は再び立ちすくみ、彼女の針だけが動き出す。

シセルの残りの武器は、腰に装備していた一本目のナイフのみ。

しかし、もはや動くこともかなわないただの的と化した魔物たちには、それで十分であった。

舞うように、緩やかな動作で、シセルは三匹の首を落としていく。静止した世界で振るわれたナイフには、血のりさえ着いてはいなかつた。

全てが終わつて。

シセルは空を見上げ、ゆっくりと息を吐いた。

「おまえたち、もう、死んでいいよ」

言葉とともに時は動き出し、魔物は次々にその首を失つて倒れていった。

残り時間、30秒。

「おっと、大事な宝箱を忘れてた」

魔物に襲われていた豪華な馬車は、今、この瞬間も走り続けている。……そこに存在しているはずの魔物の群れから逃れるために。

実際のところ、魔物の群れはすでに始末し終えていたわけだがシセルは彼らにしてもまた、逃がすわけにはいかないのだった。なぜならそれが、主人の命令だからだ。

そうして世界は三度、停止する。

自分たちの乗る簡素な馬車とは違う、見るからに造りの美しい馬車。その御者台に、無遠慮に足をかける。

そこには脂汗を垂らし、恐怖に歪んだ顔で、必死に手綱を握る御者の姿があった。

その彼を蹴り飛ばして御者台から落とし、代わりに彼女が手綱を握る。

「さようなら、哀れな御者さん」

時が動き出し、まっさきに聞こえてくるのは御者の悲鳴。

時が止まっていても、その慣性が消えるわけではない。きっと哀れな御者は、今頃苦行を終えた僧のようにボロボロになっていることだろう。

シセルは馬車を止めると、御者台から降りた。

客室部分と御者台は完全に別に作られているので、一度降りなければ客室に入ることができないのだ。

シセルは客室の手すりに手をかけて、ほんの一瞬思案した。しかし結局のところ、彼女の手には選択肢など存在しなかつたようだ。シセルは表情に諦観をにじませつつ、客室の扉をコンコン、と一度ほどノックしてみた。

すると間髪いれず、客室の中から押し殺したような悲鳴が上が

つた。

それはそうだろう、彼らからすれば、未だにボロオンに襲われている最中なのだから。

そういう中で馬車が停止するといふことは、馬がやられたか御者があられたか、またはそのどちらもかとにかく彼らにしてみれば、最悪に近い状況であることは疑いようがないだろう。

その中のノック。

彼らにはそれが、死神の手によるものに聞こえたであろうことは想像に難くない。

「なるべくなら傷つけたくないんだ。ここを開けてはくれないかな？」

とはいって、彼らの耳に届いたのは、魔物の唸り声ではなかつた。それは、細い少女の声だつた。

ぎい、と僅かな軋みをあげてドアが開かれる。ほんの一瞥で、シセルは相手のおおまかな値踏みを済ませた。

(二人連れか。女はひとり。まあ完全なハズレじゃなかつたんだ、うちのご主人様も喜ぶだろ)

一人は太った男。長く生やした髭と派手な服。おそらく貴族なのであるう。

そして女。腰に届くかというような金髪。白と赤を基調としたドレスに、指や首元を飾る貴金属と宝石たち。

シセルは、その宝石の一つ一つが、平民数人分の人生を買い取つて余りある価値を持つものであるだろうと推測した。

しかしシセルの主の嗜好からすると、それは多分おまけみたいなものだろ。彼が常に何より欲するのは、金銀宝石で飾られるところの『女』そのものだから。

(貴族か。これはまたクソ主。クソ主といふとまるでクソの主という意味になりそうで、そうなると私の尊厳がピンチであるからして、正確には脳みそがクソで出来ているとしか考えられない主が小躍りしそうだな)

「ひいーー、な、な、なんだ貴様は！？」

「しゃべるなゴミ虫。おまえに用はない」

「なんだと小娘！ 私をこの土地の領主、サンシャインデーツと知つての暴言か！！」

「おまえ、領主だったのか？ それはすばらしい」

「そ、そうだ。私が領主だ！ それより貴様、外の魔物はどうした

！？」 御者は「

「だが黙れ」

半眼で睨みつける。それだけで、男は静かになった。

「いいかデブ。おまえは喋るな」

ナイフを男の首筋に当てて、シセル。

「娘、説明しろ。そのお偉い領主さまが、なんで護衛も付けずにこんなところを無様にうろついてるんだ？」

「あ、 ッ」

しかし娘は怯えからか緊張からか、声が出ないようだつた。自らの肩を抱いて、震えている。

「そんなに脅すなよ。かわいそうに、怯えてるじゃないか」シセルの背後から、アウトの声。どうやら追いついてきたらしい。アウトはへらへらと緊張感のない笑みを浮かべたまま、客室に乗り込んでくる。

貴族用の客室なので、もともと広いつくりではあったが、さすがに四人が乗り込むと少し窮屈に感じる。

アウトは室内を視線のみで見渡して、「男はいいや」と呟いた。その意を汲み、シセルはナイフを振り上げる。

「ひツ
！」

「ま、まつてくださいッ！」

必死に、搾り出したような、そんな少女の悲鳴。涙交じりのそれは、人形のような少女に似合ひ、可憐なものだつた。

少女の叫びに、シセルのナイフが止まる。

何か問題があるのか？と言わんばかりの怪訝な表情で、少女を見る。

「お、お父様を殺さないで！」

「ひやばばばばば」

小便を垂らしながら、命の恐怖に震える領主。そしてそれを庇う娘。童話のように美しい光景がそこにはあつた。実際に見るとまったく美しくないのが、また哀れを誘つ。

肩を震わせ、力チカチと歯をならしながら、それでも父の命乞いをする少女。

シセルはその娘の行動を前にして、アウトを振り返る。

男をどうするのか。その確認のためだ。

その動作の意味を、娘は理解した。

まだ、生き残る日はある、と。

「お金ならば差し上げます。どうか、どうか父を殺さないで　」

「金はもういい。ちょうど路銀がやばかっただしな。あとは、そうだな。おまえも俺のモノになるなら、そこのブタは生かしとしてやる」

それはあまりに鬼畜な提案だった。

絶句する少女。

そして馬の排泄を叩撃したかのような視線をアウトに送るシセル。「条件は寛大だ。有り金全部。そしてお前。たったこれだけで豚が一匹屠殺を免れる」

いてもいなくともどちらでもよかつた男。ただそれを生かすというだけのために、アウトはこれだけの条件を平然と突きつけてみせた。……それも、こんないたいけな少女に。

なるほど、外道の道をそれることなく歩んでいる。シセルは表情を急速に乾燥させながら、誰にともなくそう首肯した。

「あ、うあ……」

あまりの条件に少女は固まっていた。少女はいまだ処女である。その穢れを知らぬ身には、それはあまりにも無体な条件であった。しかし、少女がそれを飲まなければ、少女の父は間違いなく殺されてしまうのだ。

「…………わかりました」

そして、少女はうなずいたのだった。

しかし、彼女はそこで終わらなかつた。

「ですが、条件があります」

覚悟を決めた少女は、もはや震えてなどいなかつた。

「なるほどな、城を救えつてか」

「はい、それが条件です」

二日前、サンシャインデニーズ領バイプッシュ城を魔物の大群が襲撃した。

兵の奮戦も虚しく城は陥落。

領主とその娘は、なんとか馬車で脱出したものの、城は魔物の徘徊する魔城と化したという。

「なるほどなるほど、そいつは無茶だな」

おどけるように両手を振り上げて、ヘラヘラ笑う。

太った男は馬車の外に蹴りだされていた。生きていようが死んでいようが構わないでの、逃げられたところで問題はない。

娘の名はクロシー・マカロニア・F・サンシャインデニーズ。覚悟を秘めたその瞳は、なるほど確かに貴族と名乗るだけがある。領地を背にした者の覚悟。そんなものが娘の瞳には浮かんでいた。

サンシャインデニーズ家の歴史は浅い。

先の王国と帝国の戦争（戦争自体が頻繁に起こるため、よほど大きな場合を除いて名称がつけられることはない）で武勲を立てた成り上がりの家である。

その功績をもって得たのが現サンシャインデニーズ領であつた。故に、彼ら一族の領地に対する執着は強い。

祖父が自らの一命を賭して得たそれ。その領地をそつくりそのまま引き継いだ父は、それは確かに無能ではあつたかもしれない、しかし領民からは慕われていた。

クロシーはその娘である。魔物の群れに沈む城を背に、噛んだ唇には血が滲み、泣き晴らした瞼さえ、今にも血を流しそうな様子だった。

もはや、失うものは全て失つたのだ。

城を失い、領地を失い、何も持たない貴族が、いまさらどこに迷うようというのか。

失意の父を前に、娘はかける言葉をもたなかつた。告げるべき言葉を知らなかつた。

だが、今や状況は変わつた。

角を持つた彼女　鬼の末裔　はボロオンの群れを瞬殺してみせた。文字通りの意味で、瞬殺だつた。

魔眼。鬼の一族を見たものが、まず思い浮かべるのはそれだ。人間と比べるのが馬鹿馬鹿しいくらいの、驚異的な肉体性能。たしかにそれも鬼が地上最強の生物である一因ではあるだろう。しかし、それだけならばより強力な魔物はいくらでも存在する。彼らが無敗を誇るのは、その眼があるからだつた。

もはやこの大陸のどこにも、彼らに敵う者は存在しなかつた。しかし、彼らがこの大陸の覇者となることもまた、決してなかつた。元来からして戦闘民族たる彼らは、切実に戦いを求める。彼らはその本能に正しく従い、戦う。彼らに敵として相対することのできるものが他に存在しないというならば。彼らは彼ら自身の間で、同族の間で殺し合いを繰り広げるのである。

故に、鬼の人口は記録に存在する限り最古の記録から、全くといって変動がない。むしろ徐々に減少してさえいる。彼らは常に、ごく少数しか存在しなかつた。

それが、彼らがこの大陸の支配者足りえない理由の一端ではあつたのだ。……もっとも、最大の要因はと問われたならば、それは彼らの破滅的ともいえる協調性のなさではあつたのだが。

そんな鬼の一族と出会えた奇跡。

クロシーにはもはやその奇跡に縛るしか術がなかつた。たとえその代償が、自らの身を捧げることであつたとしても。

「無茶だが、まあ、不可能ではないな」

答えるアウト。その返答は、限りなく望みのものに近かつた。

「しかしだ。安すぎると思わないか?」

魔物の支配する城を単騎で落とせ、と言つてゐるのだ。それは誰もが逃げ出すほどの無茶な要求だ。

しかし、少女は笑う。いや、それは頬が引きつっただけだつたかもしれないが。たしかに、少女は笑おうとした。

「私の値段が、ですか？」

「なるほど。たしかに。たしかに。これはそれほど悪い取引じゃあないみたいだな」

ヘラヘラと、彼は笑う。

その顔をクロシーは真剣に見つめていた。

鬼の一族に協調性といったものは皆無である。基本的に彼らは群れない。一騎当千、それこそがまさに彼らの在り方なのだ。

そんな鬼の少女を従えている男。それは、常識から言つてまずありえないことなのだつた。

彼らが誰かの下につくなどといふことは、まずもつてありえない。誰もがただひとつの頂を目指す種族、そのような存在を従わせることが不可能でしかない。

しかし、非現実であるはずのその光景が、今この瞬間、現実としてクロシーの目の前に存在していた。

賭けてもいいのではないか。クロシーはそう思つ。

狭い馬車の客室内、クロシーは床に膝を着いてアウトを見上げた。彼の手を取り　まるで騎士が女王に誓いを立てるかのようにその甲にキスをした。

「誓いは破られることはない。そうだな？」

「はい」

「では、城を落とすとしよう」

「その時は、その足にもキスをいたしましょ」

拙い少女の誘惑。しかし、アウトはそれに心地よさを覚えた。好感の持てる純白さ。それを汚すのは、自分でありたい。

「セル、オルテガ村はまた今度だ」

「もうわかつてるよ。あなたが本当に最低のクズだということも含

めてね

「おまえは本口が悪いな。とりあえず御者はお前な。お前が御者を蹴落としたんだしよ」

理不^ハだ。そういうて、シセルは密室を後^ハした。

ドスン、と鈍い音を立てて荷台が揺れる。ビリビリシセルがテブ貴族を荷台に放り投げたらしい。

そして、馬車は走りだす。

「さて、進軍を始めようか

誰にともなく言って、アウトは視線を車外に移した。割合に小さな窓越しに垣間見えたのは、砂と、砂と、砂と　あと^ハ、彼らがここまで乗ってきた貧相な馬車だけだった。

アレとはここでお別れになりそうだな。何とはなしに寂寥を感じて、アウトはそつ笑いた。

馬車は荒野を、傍目には遅々とした、実際にも大して速いとは言えない速度で走破しきつた。

気味が悪いほどに晴れ渡った空の向こうから、ほんの少し傾きかけた太陽が、地上のものを誰かれ構わずじりじりと炙っていた。アウトの横にはシセルとクロシー。デブ貴族は邪魔（見た目が暑苦しい）なので馬車に縛つて放置してきていた。

もちろん暴れていたが、それはアウトにとつてなんら問題ではない。

少しの間、クロシーが悲しそうに父を見つめていたが、アウトはそれを無視した。クロシーもまた、結局何も言わなかつた。彼女には、アウトの機嫌を損ねるリスクを犯してまでそれを進言する勇気はなかつたのだろう。

そうして今、傍目にはどうにも調和のとれていない彼ら二人は、肩を並べて城を見下ろしているのだった。

「おいクソ主。ほんとにあれに無策で突っ込むのか？」

「そうだ。俺たちはいつもそうやつてきたじゃないか」

サンシャインデーブ領は王国の北の外れに位置する田舎領地である。

帝国と王国はいまだに争いを続け、大陸中央 最前線 では未だに国境すらまともに定まっていない。防衛線は常に流動的である。

王国は、その戦争に慢性的に兵力を割かざるをえないため、たとえ領主の居城の防衛のためとはいえ、田舎の領主のために王国軍を動かすなどということはまずありえない。

王国の皇帝、ネロ。残虐で悪逆非道な暴君と言われる彼ではあるが、無能ではない。先帝の四男に生まれたネロは、上の三人を暗殺して皇位にのし上がつたといわれている。

やがて皇帝に即位したネロは、戦争に傾倒し始めた。

北の魔物を押しとどめる役割を多少ながらもつていたサンシャインデニーズ領ではあつたが、このネロの政策の転換により、満足な兵力を整えられなくなつていった。

さらに、サンシャインデニーズ領は前領主が拝領し、開墾した領地である。王国累代の土地というわけでもなく、つまりところ歴史が浅い。

そして元々からして荒れた大地を切り開いて作られた領地である。大した収穫があるわけでもなく、故に軍備などはかかるわけもない。そのうえ、サンシャインデニーズは王国北部の山岳地帯に位置している。

領主の居城バイプッシュ城には一応のところ、対魔物防衛の役割も与えられてはいた。しかしそれは、あまり成功しているとは言えないものではあつたが。

しかも王都からも帝国領からも遠く離れている（特に王都からは恐ろしく遠い）こともあり、別段要衝の地といふこともなかつた。この土地が魔物に占領されようと、王国には実際何の危険もなかつたのだ。

故に、これらを総合すれば分かるように、サンシャインデニーズ領の、王国にとつての重要度はかなり低い。

そしてまた、こうしたいくつかの状況がかさなることで、この城は魔物の手に落ちたともいえるのだった。

バイプッシュ城の悲劇は、起ころべくして起ころつたと言つていいだろう。

「本当に、大丈夫なのでしょうか」

クロシーは不安げにアウトを見つめる。

巨大な城　己の住処だつた城　を前に、ただ三人で挑む不安。

三人とはいえ、クロシーに戦う術はない。

二人。たつたの二人で、千の兵士をもつとして守りきれなかつた城を落とそうといつたのだ。

いやしくも感情を知るものならばだれであれ、このような状況下に置かれれば、間違いなく不可能だと泣いて逃げ出しちゃうだろ。しかし。

「問題ない」

言い切つて、アウトはクロシーを抱きかかえた。俗に言つて『お姫様抱っこ』である。

「ちょ　なにをつ！？」

「お姫様はすつとろいからな。連れて行つてやる」「しかし、これは

恥ずかしい。その言葉は首にはならなかつた。

アウトが獣のような速度で駆け出したからだ。

「前衛はシセル、お前だ。後衛もお前。フォローもお前。オレはそうだな、見てるわ」

アウトの速度はますます上がる。

その山を降りるために。城を、攻め落とすために。
「いつも思つけどクソ主は本当にクソだよね。たまには自分で働きなよ

「働きたくないから奴隸お前がいるんだろう。まあがんばれよ。がんばつたらご褒美をくれてやるから」

「どうせ碌なもんじやないんでしょう。いらっしゃいよ

「ああ、それとクソだクソだ言つたお仕置きは後でちやんとしてくるからな」

「それこそいらないよ」

抱きかかえられながら見上げる、彼らは実に楽しそうだった。

これから死地に赴くとは到底思えない。

その楽観的な彼らの雰囲気に、クロシーは次第に安堵を感じていった。

やはり自分は間違つてはいなかつた。

……そんな確信と共に。

城壁の高さは、見たところ五メートルほどはあるだろ？か。しかし、魔物の被害を受けて、ところどころに崩れている部分があつた。アウトはその城壁のほこりびに身を投じる。無論シセルもそのあとに続いた。

薄暗い石造りの回廊に、彼らは降り立つた。

銃眼の他には大した採光窓も存在しないというのに、どういう仕組みかはわからないが、あたりは歩きまわるのに不自由しない程度の明るさに保たれているようだった。

素材の大部分を石に頼っているためか、城の内部はひんやりとして、涼しくすらあつた。

クロシーは、その冷氣のなかに魔物の気配を感じるのが、時々ビクビクと身体を震わせている。

「なんだ思ったより静かだな。もっと汚いのが押し寄せてくるかと思つたのにな」

「そうだね。私は楽でいいよ。ずっと静かならいいのに」

言いながら、シセルは前方の曲がり角にむかつてナイフを投げた。不用意に顔をだした魔物（体毛の濃い一足歩行のゴリラのような姿をしていた）の耳のあたりに突き刺さるナイフ。

シセルは、悲鳴すら上げずに、一撃で絶命した魔物からナイフを引き抜き、軽く振るうことで血を拭うのに代える。その繰り返し。出会いがしらに魔物の処理をしては歩き続ける。彼らはいまだに戦闘らしい戦闘はしていなかつた。

当初に彼らが予想したより魔物の数がいない。もはや城から人間という餌がいなくなつた今、魔物たちは新たな餌を求めて、どこかまた別の場所へ去つていったのだろうか。

……しかし、この城を飲み込むほどの大群れだ。それが離れていつたとなれば、その附近を旅している限り、必ず群れの幾ばくかとは

遭遇するだろ？。

しかし、アウト達は城までの道程で、そのような群れには遭遇しなかった。魔物の群れでさえ、馬車を襲っていたボロオンの群れ以外は見ていない。

彼らは確かに違和感を覚えていた。しかし、その違和感の正体が何であるのか、それに思い当つたものはまだ、この時点では存在しなかつた。

そして、彼らは見つけたのだった。

中庭に積み上げられた、魔物の死骸、その山を。

そして出会う。

その山を築いた魔物に。

その魔物は、死骸の山からアウト達を睥睨していた。いや、明らかにアウト達を見下していた。

その姿形は、城の南側に設けられた小さな塔の影になつていて、はつきりとは観察できない。

彼が廻殺したあまたの死骸たちの返り血に塗れて、異様な具合にぬめり光る、巨大な黒い塊　クロシーが一見して覚えたのは、そのような感想だった。

魔物は、自らが絶対的な強者であることに何の疑いも抱くことなく、ただごく当然の事であるかのようにそれを確信している。

誰であれ、その場に立てば　その魔物と相対せば、魔物が抱く強大な自負と、その裏にある他者への侮蔑、嘲りがはつきりと感じられただろう。

「ザコの掃除を先にしてくれた親切な奴がいるぞ。シセル、おまえ礼を言つとくべきじやねえのか？」

「まあ確かに余計な労働が減つたのはいいことだけど、別にアレに礼を言うほどのことじやないよ」

しかし、そんな鬼の様子は、アウトやシセルには何の影響も及ぼ

さなかつた。彼らはいつも通りに、平時と何の変りもなく、軽口を叩いてみせる。

「感謝の気持ちがねえなあ。だからお前は絶望的に社交性がねえんだよ」

「社交性がないなんて言葉で他人をなじる奴に、そんな御大層な社交性があるとも思えないけどね」

強大な敵を前にしてすら、態度をえることのない一人。彼らの間だけで緊張と緊迫が薄れていくな、クロシーはひとり置いていかれたように、ただただ怯えていた。

彼女は身体を小刻みに震わせながら、必死に そう、必死に自らの視線を、魔物から引きはがそうと努力しているようだつた。クロシーの細い指は、アウトの袖を掴んで、小さく震えていた。それは恐らく、じうじつた状況下においてはじく順当な反応であつただろうし、もしかすると、それは割合に控え目な反応であつかもしれない。

悲鳴を上げて逃げ惑うようなことをしたところで、誰もクロシーを責めることなどできなかつただろう。

しかし、アウトはその反応に、新鮮なものを感じていた（そうだ、これだコレ。この庇護欲をそそる子鹿のような反応！）ここしばらくシセルと一緒だつたから忘れてたが、これが女の子つてヤツだよな。）

「……」

にやにやと嫌らしい笑みを浮かべるアウトを、シセルは腐りかけた生ゴミに銀蠅がたかる様子でも見るよに、乾いた表情で眺めていた。

「…… と。

「ははは！ こいつはすごい！ 時の姫君じゃないか！ ゴミしかいないと嘆いていたところだ！」

緩みかけた空氣の中で、徐に魔物が笑つた。

視線の先には、シセル。

「なんだおい。魔物がしゃべったぞ。シセル、おまえの知り合いか？」

「知らないよあんなやつ」

アウトが指差す先で、魔物が立ち上がった。
ぐちや、ぐちや、と数多の魔物の死骸を踏み潰しながら、魔物は
ゆっくりと わざとそうしているかのように、じくゅうくくりと歩
み寄つてくる。

魔物の姿が、田田のもとに晒される。そして、クロシーはその魔
物の姿を見た。

一メートルはあるかといふ巨躯と棍棒。あまりに巨大な棍棒のため、傍から見た魔物のバランスをひどく歪にさせている。

魔物は赤いボロ布（恐らく血の色である）を腰に巻き、上半身
は血にまみれながらも見事としか言つほかない肉体を、誇らしげに
露出させていた。

しかし、なにより田立つもは、それは魔物の額にあった。
ユニコーンを髪髪とさせめるような長い一角が、その額からは生え
ていた。

クロシーは思つ。

その姿はあるで。

まるで鬼のようじやないか、と。

「オレの名はゲティパス。わかるだろ、時の姫君。数少ない、同族
だよ」

「まあ、そんなに目立つ角があつたら、誰だつてわかるよ」

「そりゃあそうだ。俺たちは鬼だからな」

「そうだね。私たちは鬼だ」

彼ら鬼が、大陸を制覇できない理由。

それが、今まさに、この場所に存在した。

鬼たちが望みうる最上の敵が、彼ら自身である限り。

彼らは彼ら自身の間で、同族の間で殺し合いを繰り広げるの

だ。

ぐしゃり、と肉が潰れる音。

シセルは自身の左腕を見やつて、その顔を歪ませた。

一の腕から下が、完全に潰れている。その激痛が、シセルの行動をワンテンポ鈍らせた。そして、それは致命的な速度差を生む。左腕を潰した一撃。右から左になぎ払われたその勢い、そのままにゲティパスは一回転した。

遠心力を加え、さらに破壊力を増した一撃がシセルを襲う。間に合わない。舌打ちする間もなく、シセルは半回転して右腕を盾にした。

手にしたナイフは、ガラスのように碎けた。ナイフを潰し、腕を潰し、なおとまらない棍棒は、シセルの肺を抉りこむ。まるで蹴鞠の鞠ように、シセルの身体は宙を舞つた。

彼女は、すでに半壊していた城壁に突っ込んで、爆音を響かせる。崩れる瓦礫の中、それでも意識を保つて、シセルは追想した。なぜ、時が止まらなかつたのか　　と。

「そりゃあそうだ。俺たちは鬼だからな」

「そうだね。私たちは鬼だ」

殺し合いは、そうして始まった。

棍棒を　　準備運動でもするかのよつに軽く　　振り回しながら、歩み来るゲティパス。

腰から一本のナイフを抜き、逆手で構えるシセル。

鬼に特有の能力であり、彼らの最大の武器であるところの魔眼は、初見の相手に対しては、ほぼ絶対ともいえるアドバンテージを持つ。なぜなら、魔眼は個体によって発現する能力が全く違うため、そ

の能力を予測するのが極めて難しいのだ。

故に、名が売れた鬼というのは、そういうアドバンテージを得られない。

時の姫君などと呼ばれ、もはや時を止める能力が有名になってしまっているシセルは、そういった意味では鬼の中では大きなハンデを背負つていいということになる。

それもまた戦いのひとつ。それを事前に知っているということを、ゲティパスはなんら姑息なことだとは考えない。

不利になると分かりきっているのに、有名になるほうが悪いのだ。それはおおむね、鬼達に共通した見解であった。

「悪いけど、きっとあなたは勝てないよ」

自らの能力への絶対の自信。それがあるが故に、シセルは事もなげにそう呟いた。

そして彼女は時を止める。

容赦などなく。ただ時の止まつた世界で、ゆっくりと確実に相手を絶命させるために。

私の能力を知つていながら、私の前に立つほうが悪いのだ。彼女はそう思つて、

「！？」

しかし、ゲティパスは笑つた。

そう、彼は笑つたのだ。

時の、止まつた世界で。

その双眸を、血の色に輝かせて。

「何も不思議なことじや あない。そういうこともある。 じつじつともできる。だから俺たちは鬼なんじや あないか」

そう言つて、ゲティパスはその棍棒を振りかぶつた。

驚愕し、一瞬の隙を見せたシセルは、それを避けることができなかつた。左腕を犠牲にする覚悟で、防御する。

結果は、無残なものだった。

両腕を碎かれ、潰され。足が折れ、肺が一つ、潰れている。

頭を掴まれ、まるでボロ雑巾のように、シセルは瓦礫の山から持ち上げられた。

「ミシミシ」と音を立てて、シセルの頭蓋が軋む。

「あ、ぐう……ッ」

「時の姫君の最後だな。あつけない。有名人ほど早く死ぬ。悲しいもんだなあ」

それは、シセルに向けた言葉か。または、これから有名になるであろうという確信を持つた、自身への言葉か。

何にしろ、ゲティパスは嘆くように、そう呟いたのだった。

「オレの能力の説明、聞くか？」

敗者を哀れむように。指にはさらに力をこめて。

「ぎう　あう……う……」

もはや視力の怪しくなった瞳で、それでもシセルはゲティパスを睨み付けた。

その勝ち誇った顔に、唾を吐きかける。

そんなものはいらない、とばかりに。

「まあ聞けよ。こうして能力を過信した鬼をぶち殺す瞬間に、タネを明かすのが最高に気持ちイんだからよ」

吐きかけられた唾液を拭いもせず。ゲティパスはその右腕で、シセルの身体を城壁へと叩きつけた。

ゲティパスはそのまま、シセルの体で城壁を削り取ろうとした。もするかのように、彼女の体に渾身の力を加えながら、進む。ゆっくりと、しかし、万力のように力をこめて。

「10秒だ」

歩いた端から、城壁が崩れていく。シセルは城壁に半ば埋まつたような状態で、なおもその身体を持って城壁を崩していくを得ない。

彼女はもはや、うめき声を上げることはなかつた。

「たつたの10秒だ」

やがて城壁は行き止まり、ゲティパスの歩みも止まつた。血にまみれたシセルの身体を、ゲティパスはぞんざいに投げ捨てる。

「相手の能力を10秒無力化する。それがオレの能力だ。おまえは、時を止めて10秒逃げ回ればよかつたんだよ」

残念だつたな。

恍惚の表情を浮かべて、ゲティパスはシセルの背を踏みつける。「有名人は大変だな。いい勉強になるぜ。オレもこれからは気をつけないとな！　はははは！」

何度も、何度も、何度も、何度も。ゲティパスは執拗に踏みつける。もはや、シセルは呼吸をしているのかすら怪しい状態であった。ゲティパスはまさに、勝利の美酒に酔いしれていた。

と。

「おい、魔物。忘れるようだから言つてやるが、それは俺のだ。勝手に壊すなよ」

その醉いを醒ます、無粋な声。

眼前の、そのあまりといえまあまりの光景に青ざめて、震えるしかない少女を左手に。

それはなんでもない、「くありきたりな出来事であるかのようだ。『残念だが、お前は無名のままだ』

そう言って、アウトは鬼に手招きをしてみせた。

ゲティパスには、その手招きの意味がまったく理解できなかつた。鬼の横を歩いていた人間。おそらく時の姫君の従僕なのだろう、とゲティパスは思つていた。

そんなただの人間が　主人が敗北した今になつて　逃走以外のなにをするというのか。

「おいおい従僕。俺は今おまえの主人のおかげでスゲー気分がいいんだ。見逃してやるから嬉ションたらしながら無様に逃げろよ」「そりゃあ偶然だな。俺も今、スゲー気分が悪いんだ。アホが無様に負けたせいだな」

「わかつてねえなあ。テメエみてえなゴミとなんざ戦つ氣もおきねえんだよ」

「ますます奇遇だな。俺もまつたく戦つ氣なんぞおきねえや
鬼はその習性ゆえに、弱者を酷く蔑ろに扱う。

弱者。それはつまり、戦闘民族である彼らを満足させることできぬ者、彼らの前に立つべき資格を有さない者たちのことであり。
……そしてまた、彼ら鬼は、そんな脆弱な存在を顧みることは決してない。

強さだけが価値の全てであるとする彼らは、その価値の認められぬものは、歯牙にもかけないのだ。

鬼という存在は決して殺戮者でないし、また一方的な虐殺を愛するわけでもない。

彼らはただ、鬭争を好む種なのである。

それゆえに、ゲティパスはアウトになんら思つところがなかつた。こうして、繰り返しあからさまな挑発をされている今でさえ、ゲティパスは何も感じていらない。

そのある種滑稽とも映る情景を、クロシーは死んだような気持ちで見ていた。

鬼は、逃げると言つてゐる。逃げてもいいと、言つてくれてゐる。

それなのになぜ、彼はこうも挑発を繰り返すのか。

彼女の希望は、とうの昔に、ゲティパスの足元でボロ雑巾よりも
酷い状態になつてゐる。

いくら鬼の生命力があるとはいへ、あれではもう助からないだろ
う クロシーは嫌に落ち着いた心境で、そう判断してゐた。

だといふのに。

なぜこの男はこうも強氣でいられるのか。

「いいからかかつて来いよ。それが鬼なんだろ？ 魔物」

あまりに執拗な挑発に、さすがの鬼族も煩わしさを感じたらしい。

舌打ちして、ゲティパスは棍棒を握りしめた。

吼える犬を黙らせるには、棍棒^{コレ}が一番早い。彼は武骨で長大な棍
棒を、ある種の威厳とともに振りかぶつた。

「さようなら、だぜ。人間」

「ああ。さようなら、だ」

アウトは自らの右手を鬼に向けて突き出した。

瞬間、その掌から、膨大な熱量を伴つた光の柱が放たれた。

その熱光波は、ゲティパスの胸を貫き、さらにその背後の城壁を
消し飛ばした。

「ああ……？」

ゲティパスの脳は、何が起こったのか理解することができなかつ
た。

古に謳われる戦神の、剛健極まりない肉体を髪髪とさせるような、
ゲティパスの見事な胸筋。それが、まったく防御という役割を果た
すことなく、消え去つていた。

ゲティパスの胸板には、アウトの側からであれば、背後の景色ま
で見渡せるほどの、薄暗い、子供の頭ほどもあるような大穴が出現
していた。

「あ……ぐ、あ……」

一步、三歩。

そして、彼は四歩歩くことができなかつた。

糸の切れた操り人形のごとくに、一切の防御姿勢をとることが叶わず、ゲティースパは倒れ伏す。

そのときやつと、思い出したかのように、彼の胸の大穴から血があふれ出した。

ゆっくりと、散歩に出かけるような歩調で、アウトはその死につある巨体に近づいていく。

「俺の能力の説明、聞きてえだろ？」

ゲティパスの苦痛に歪む顔を、まるで見たくないとしても言ひようには、その右足でもつて踏みつける。

「が、ああ、あ……」

ゲティパスは思つ。なるほど、そんなものは聞きたくない。聞く必要はない。

もはや自分はここまでなのだから。

「まあそつ嫌がらずに聞けよ。こいつして能力を過信した鬼を、ぶち殺す瞬間に、タネを明かすのが最高に気持ちいいんだからよ」
なるほど、こいつは最低の気分だ。

鉄の臭いに咽せ、血の塊を吐き出しつつ、ゲティパスはようやくそれを理解した。

「魔法だよ魔法。俺は魔法使いなんだ。信じるか？」

「ゲティパスはもちろん信じしない。」

魔法など存在するはずがないからだ。

そんなものが、もしこの世界に存在したのなら、鬼はこれほど孤独にはならなかつただろう。

ゲティパスは、アウトの意図を計りかねて顔をしかめる。

「信じねえだろうな。まあ、そりやあそうだ」

頭蓋を圧迫する足、それに徐々に力を込めながら。

「魔法を使う能力。簡単だろ？ それが俺の能力だ。体内の血を消費するっていうクソだるい制限はあるがな」

言つて、アウトはゲティパスの頭部を踏み潰した。堅牢な頭蓋も、

そのなかの儚げな軟組織も、みな一緒に爆ぜて、石畳に凄惨な模様を描いた。

瞬間、短い悲鳴をあげてクロシーが顔を逸らした。少女には、刺激が強すぎたらしい。

「なんだ全然気持ちよくないな。やっぱ魔物の考えることはわからねーや」

そしてアウトはその視線を、ピクリとも動かないシセルへと向ける。

「まつたぐ、ボロ負けしやがって」
貧血になっちゃうぞ。

もはや生きているのかすら定かではないシセルを眺めて、アウトはそうひとりごちた。

パチリ、という音が聞こえてきそつなほど、唐突にシセルはその瞼を開いた。

血の匂いと、血の匂いと、血の匂い。

そして、中庭の惨状を目にして、彼女はその過程を思い出したのだった。

(また負けた)

泣きながらこぢらを覗き込んでいるクロシー。その少し後ろ、ニヤついた顔を隠しもしないで、アウト。

傷の状態を確認するように、右手に力を入れる。動く。次いで左手、右足、左足。まるで損壊など初めからしていなかつたかのように、それは過不足なく動いた。

「おいおい。まずはありがとうございます、だる？」

その尊大な物言いに、シセルは顔をしかめた。

「……ありがとうございます」

睨む、というよりは、侮蔑の視線をアウトに向けて、シセルは血を吐くように礼を述べた

損耗のひどい死体のようだつたシセルの身体は、今はもうその傷跡さえなく回復していた。

それがアウトの魔法。

自らの血を代償に、奇跡を起こす。

それはこの世界で唯一彼にのみ許された、万能の能力なのであつた。

「さて、城の魔物は全部ここに積まれてるようだしな。仕事はおしまい、だな」

そうしてアウトはクロシーへと視線を向ける。

四肢が使い物にならないほど潰れていたシセルを間近でみたせいか、それが砂時計をひっくり返したかのように回復していくさまを

見たせいか。とにかくクロシーはボロボロと泣いていた。

アウトの視線の意味に気づき、彼女ビクリと身体を揺する。

バケモノだと、思った。

千の兵士を飲み込んだ魔物の群れ、それを「ノリ」のよつて始末してみせた鬼。その鬼を一撃で沈めたアウト。

単純な不等号は、やがてアウトの異常性をクロシーに突きつけていた。

怖い、と思う。

今までそのバケモノの袖を握っていた右手。その指の、震えがとまらない。

「契約は無事達成だな。まあ、ちょっとばっかり城壁が壊れたが、そりゃあ俺のせいじゃねえしな」

「……あう」

「誓いは破られることはない。そうだな?」

アウトのその台詞を聞くのは「一度目だ。一度目は、ためらひ」となく是と頷けた。

なら、「一度目は?」

そしてクロシーは思い至るのだった。選択肢など、初めから存在していないことに。

「わたくしは、あなたのものです」

そう言って、クロシーはただ頷いた。

「城を、サンシャインデニーズの誇りを取り戻してくださいって、ありがとうございました」

荒れ果てた中庭で、服が、膝が、土に汚れるのも構わずに。クロシーはその両膝を

ついて、頭を下げるのだった。

そして、目の前に、足を向けられる。

クロシーは、一瞬、その意味するところがわからなかつた。しかし、はつと思い出す。

誓いの言葉、自分はなんと言つたか。

その行為は、年端もいかぬ少女には、あまりにも酷なものがあった。見上げると、脣の端を吊り上げた靴の主と視線が合つた。彼の眼は無言で言つていた。

やれ、と。

そのとき少女の脳裏に浮かんだものはなんだつたのか。父のことか、母のことか。それは、少女のみが知ることである。

兎に角。

少女は、その靴に、口付けをかわしたのだった。

「おい、負け犬。おまえもやれよ。先輩だろ？ ちゃんと手本をみせてやれ」

一連の光景を視界の端に捉えていたシセルは、その言葉がくることを半ば予測していた。

「いやだ」

拒絶の言葉は、考えるよりも先に出でていた。

シセルのその細い首に、突如として首輪が出現した。繫がれた鎖の先にはアウト。

魔法とは、かくも無駄に使われるものなのであつた。

「やれよ。『ご主人様をたのしませるのが犬の仕事だらうがよ』

ぐいぐいと引かれる鎖。両手で持つてそれに抵抗するが、まるで叶わない。ズリズリと、

地面を抉りながら徐々にアウトへと近づいていく。

「いやだー」

しかし、止められない。

アウトの足元に引きずられてきたころには、シセルの足元には大きな土の山が出来上がつていた。

「手間のかかる犬だな、おい。『舐めろ』」

それはアウトの奴隸となつた者にのみ効力を發揮する、力のある

言葉だつた。

シセルに埋め込まれた呪いが、奴隸契約に基づき、彼女の自由を縛る。

それは決して逃れることのできない制約であった。

そして、とうとうシセルはあきらめる。

抵抗とは虚しいものだ。最後は、どうあがいてもこうなるというのに。

奴隸に落ちたあの日から、彼女には本当の意味での自由などなかったのだ。

あがいて、もがいて、そして、シセルはその靴にキスをした。

「さてと、今日は疲れたな。お姫様、あなたの寝室にでも案内してくれよ」

「まだ土下座の姿勢を崩さぬクロシーに向けて、アウト。」

「おい、負け犬。お仕置きしてやるからさつさと行くぞ」

クロシーにも首輪をつけ、二人を立たせる。クロシーはすんなりと立ちあがつたものの、シセルを立たせるには、少し鎖を乱暴に引かねばならなかつた。

「寝室は、こちらになります。今も使えるかわかりませんけど……」
俯いたのは、自室の惨状を思ったからか。それとも、これから行われるであろう行為を思つたからか。

「クソ主は本当に節操がないよね。まだ昼間だつてのにさ」

「クソだクソだ言つた分は、たっぷり可愛がつてやるよクソ奴隸」

そして、彼らは城内へと消えていったのだった。

チユン、チユン。

窓から差し込む日差しは、清涼感あふれる爽やかなものだつた。対して、その寝室は清涼とも爽やかとも言えないような惨状だった。

初めてを捧げ、シーツを血で汚したクロシーは、アウトの横で寝息を立てていた。ぐつたりとして、しばりくは何があつても起きそうにない。

そしてなによりも、室内を淫靡に染めているのはシセルであつた。様々な体液で汚れた身体をそのままに、いかがわしい道具の山に埋もれて、気絶したように眠つてゐる。

そんな爛れきつたハーレムの主　　アウトは、ズズメの鳴き声とともに朝を迎えたのだった。

いまだ全裸で眠る女たちを愛おしそうに見やり、満足そうに笑う。その心は、クロシーを手に入れた充実感と征服感で満たされていた。

(こいつも俺の住処に住まわせるか)

いまだぼやけたような思考の中で。

アウトはこれからのこととぼんやりと考えるのだった。

廃墟（と呼ぶにはいまだ生活観をたもつていた）と化した城の食堂。そこで彼らは朝食をとつていた。

パンに干し肉とミルク。それは旅の間となんら変わらないメニューではあつたが、食物庫も荒らされ、調理施設も半壊している有様の中では、それしか食べるものがなかつたのである。

「これからどうすつかなあ

「オルテガ村は？」

「そうだった。オルテガ村だ。そこで噂の「まじメシ」を食つんだった

「まあ、オルテガ村にいらっしゃるのですか？ あそこは温泉もありますし、いいところですよ」

そうして朝食を終え、一行は旅支度を始めた。

そんな中、クロシーは、一体自分はどうすればよいのかと迷っていた。

何の力もない娘である。彼らの旅についていくには、彼女はあまりにも非力すぎた。

その迷いを見透かしたかのように、アウトはクロシーにへらへらと笑いかけた。

「おまえはもう俺のモノだからな。さすがに旅には連れていけねえけど、俺の家に住まわせてやるよ」

言いながら、クロシーの首筋を優しく撫でる。そこに、首輪が現れた。

それが、アウトのモノであるという証なのだろう。

クロシーは複雑そうな表情で、自らを戒める首輪を撫でた。

「そいつは許可証だ。俺の家に入るためのな」

アウトの言葉を聞いた、その瞬間。

クロシーの視界は暗転した。

眼前に広がるのは、深い森のようだった。

その森を抜けたところに、巨大な建造物 城が建つていた。

見たことのない城だった。バイプッシュ城とは比較にならないほど豪華で、絢爛な造り。

対魔物用の砦としての意味合いも持つて建立されたバイプッシュ城とはまったく違う、宮殿としての美しさを持つ城が、そこにはあつた。

まったくの突然に現れたその光景に、クロシーの理解は追いつかなかった。

なかつた。

「天空城。いいところだろ？ そこのらの山よりはるか上を飛んでる浮遊大陸に作つた城だ」

横でアウトがそう説明するが、クロシーには理解できない。
浮遊大陸など。御伽噺でしか聞いたことがない。

呆然として辺りを見まわしていると、城の入り口に女が一人、立つていてるのが見えた。

それぞれメイド服を着ている。この城の使用人なのだろう。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「シセル様はごいっしょではないのですか？」

「ああ、こいつを置きに来ただけだからな。新人だ。優しくしてやつてくれよ」

「新人、ですか。相変わらずご主人様はカスなんですね」

「どうせ攫つてきたんでしょう？ あなた大丈夫だった？ あのゴミ野郎にひどいことされてない？」

「あ、え？ ……はい」

クロシーは頷くことしかできなかつた。

「私はシーツ。こここの奴隸長みたいなものね。なにがあつたら私にいつてちょうどだい。このクズを殺すこと以外なら大抵してあげるから」

シーツと名乗つたのは、年の頃20くらいの女だつた。クロシーは彼女に、聰明で沈着冷静、そんな印象をもつた。

「あたしはローザね。仲良くしましよう」

ローザは、にこにこと気さくな笑みを向けてきた。青いショートヘアの女性で、年齢はシーツよりもくらか幼く見えた。天真爛漫という言葉が似合いそうなひとだ、クロシーはそう思つた。

「あ、その……私はクロシー・マカロニア・F・サンシャインデニアです。クロシーと、呼んでください」

微笑ましい（詰られている感はあるが）自己紹介が終わり、クロシーは城のなかへと案内されていった。

それを笑顔で見送つて、アウトは転送の魔法を発動させたのだった。

バイプッシュ城にもどり、シセルと合流する。

そして、オルテガ村へ向けて旅だとうといつとこりうで、彼らは気づいた

朝日を背に、威風堂々とやつてくる馬車　いや、馬の姿に。
既視感。

それは、アウトたちが最初に乗つていた、ボロボロの馬車だった。「はは、あいつ自力でここまで来たのか。あいかわらずしぶとい馬だな」

「同じクズなご主人様に仕える身としては、あの忠誠心は理解できないね」

そうして彼らはまた、旅にでる。

次の目的地は、オルテガ村だ。

しかし、彼らは忘れていた

クロシーですら、ほぼ完全に忘れていたといつてもいい。

馬車に縛られて放置された、あのデブ貴族の存在を。

彼は涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしながら、未だに呻き声をあげていた。

彼の地獄は、平穏をとりもどして、生き残った兵たちがその馬車を見つける三日後まで続いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8844t/>

幻想詩篇

2011年7月3日03時11分発行